

施設で看取るということ

平成 22 年 12 月 1 日

社会福祉法人白女林 特別養護老人ホーム 白楽荘

看護師長 高嶋 弥生

1、死を迎える場所についての所感

介護保険の導入により特別養護老人ホーム（以後 特養）においては介護度が高く、複数の疾患を持った超高齢者が多く入所してまいります。その中でターミナルケアを積極的に行なうべきと言う方向性がありますが、実際は看取りケアが進まない現状にあります。理由のひとつには、医療を支える医師の不在や看護職が少なく夜間不在になることが主たる理由と考えられます。

ターミナル期は積極的治療を実施しないも少量の輸液と酸素吸入等で安楽な死を迎える人が多くいます。昔のように（畳みの上で死を迎える）事が殆ど出来なくなった現状からも（慣れた場所での死）は理解しているつもりでも特養においての見取りは、安楽への対応が設備や人員上困難であると考えられます。

そのため私たちは、現在の体制の中で医師 看護師 介護士等他職種との連携を十分考慮しながら看取りを慎重に実施していかなければいけないと考えています。

2、白楽荘の看取り

幸い当施設は診療所が併設しており看取りケアの実施が出来る環境にあります。看取りケアの開始としてなんらかの疾患又は老衰による摂食障害があり生命に危険がある時がターミナル期に入る時期と捉え医師からご家族様へ説明します。入院を希望されるか、当施設で経過を観察していくか等の判断をして頂きます。当施設で希望された段階から看取りケアを開始していきます。看護師 担当ケアワーカー ケアマネジャー 相談員 管理栄養士 機能訓練師等他職種とご家族様の思いを踏まえたカンファレンスを持ちその人が、どのような生き方をしたかを知り、その人らしい終末をどのようにしたら送る事が出来るのか、施設で出来る苦痛緩和を念頭に置きながらケアに当たって行けば良いのか検討していきます。

- ① 環境の整備＝好きな音楽 家族や友人の写真の掲示 季節感を設定した飾りつけ アロマーによる癒し 家族様がくつろげるようにソファの設置等環境の整備
- ② 頻回に訪室し声かけやボディタッチ なじみの入所者様の面会の設定
- ③ 少量の輸液や酸素吸入 必要時の鎮痛剤や抗不安剤の投与
- ④ 清潔保持の為出来るだけ入浴の実施 定期的な体位交換による褥創予防

⑤連絡ノートを作制し日々のケアやエピソード、ご家族様の思いを自由に記載して頂き交換しています。(写真参照)

以上のようなケアを実施しながら1週間毎に看取りカンファレンスを行いながらケアを振り返り、ケアプランに反映しながら記録の充実を図りその人らしい終末を迎えて頂ける様に取り組んでいます。

3、考察

看取りとは？疑問を投げかけ時、定義付けることは難しいと思いますが、私は、誰かに自分がこの世で生きてきた最後の(しるし)を看ってもらうことだなあと考えています。人生の最後を自分で決められ、なにを望み、そして家族や友人に囲まれて、見守られながら最後を迎えることが理想な事かもしれません。しかし当施設の入所者は超高齢者が多く急激に身体機能の低下が現れ、自分の思いや希望も発しないまま悪化していき看取りに入っていきます。特養は、高齢者の生活の場としての施設で在る為に避けては通れない(死)という問題があります。

その為、私たちは、入所したときからその人の人生を受容し共に過ごしていくことが看取りケアの始まりだと言う概念を持ち、日頃から個人の生活歴や人生観を尊重ながら、少しでもその人らしく過ごせるように、日々の介護の中で尊厳を持ち寄り添えるよう心がけていく事が大切だと考えています。心を傾けて笑ったり泣いたりし共に生活してきた人の人生の最後をしっかりと見据え介護していくことが重要だと考えます。

3、最後の取り組み

死を迎えた人を最後まで悼み見送る事が私達職員の務めと考えています。その為、最後のお別れに重点を置き、エンゼルケアの見直しを検討しました。詰め物は必要時のみとし原則しない。手は自然のまま無理に組まないようにし、し数珠を持って頂く。メイクは下地を十分に慎重に行ないます。時に御家族様に声をかけお手伝いして頂く事もあります。いつものら仕事をして化粧なんかしたことないのにきれいやと感動された御家族様もいらっしゃいました。仏間に移動して頂き鎮火台を設置し施設内勤務者はお参りしてお見送りします。(職員も数珠を持つ)

②お通夜や告別式に参加

③家族が落ち着いた時期を見ながら、グリーフケアを行ない家族と共に思いを共有する。(施設内はしのぶ会と名称)

④毎月月参りをさせていただいています。

⑤毎年9月物故者法要を行い、その年に死亡された方の御冥福をお祈りします。

私は、その人らしくとかその人らしい生き方とか、簡単に言葉を発していますが、その人らしいとは？一体なんだろうかと常に疑問を持っています。人生の最後の数日を共に過ごした利用者に対し一体何が理解出来るだろうかといつも疑問をなげかけながら、尊厳を持つと共に愛おしいと感じる気持ちを大切にすることが特養においての使命であり看取りケアに繋がると感じています。